

# 入中3年人権だよ

徳島市 八万中学校  
3年生 第6号  
2021年 4月30日  
編集・文責 吉成正士

「芽吹き」のなかで、顔に大きなアザのある典子ちゃんがいじめられるシーンがありました。先の発言も、「勇気」ある発言だったと思います。でも、一見マイナスに思えることから目を背けることなく、敢えて「この世界に生きている証拠」と受けとめることで、それまでマイナスだったことが180度ひっくり返り、プラスになってしまうのだと思います。

その「勇気」を乗り越えて、先月、シンジもはなちゃんも、自分のことを語ってくれました。昔のこと、部落差別の成り立ちについて、私はあまり重要だとは思っていません。あまりこだわらなくてもいいんじゃないかと思っています。もちろん、知りたければ学べばいいと思います。でも、もっと重要なのは、「今ある部落差別をどうするのか」ということです。二人の語りにどう応えるか、です。

「芽吹き」を見て、おばあさんのしたことが許されるわけでもないし、本当にひどいことだけど、きちんと部落や人権について理解ができて良かったです。おばあさんは、自分のしたひどいことを、みんなの前で正直に話そうと思うくらいに反省し、申し訳なく思えるようになり、人の意識は変わるんだなどと思いました。もしも、私の愛する人や友達など、大切な自分の身のまわりにいる人のことを家族に否定されたら、本当に悲しいです。おばあさんの息子さんも、結婚したいのに、家族に否定され、邪魔をされてつらかったのに、諦めなかった姿勢や考え方が間違っていると言いつつ切ったのは、すごいと思ったし、愛する人への思いがとてもし大きかったんだなと思いました。

この「芽吹き」を通して、差別の意識や人の気持ちを変えることができるのは、人なんだなどと思いました。今、私は結婚するような年齢じゃないので、まだ先のことでよく分からないところが少しあるけれど、もし自分が結婚するような年齢になったときにも、結婚差別について覚えていたいと思います。

私の願いとして、「芽吹き」の学びを、「自分が結婚するときのためとは思わないでほしい」というのがあります。もしかすると、そのような場面になる人もいるかもしれません。でもそれだけではなく、進学先やこれからの人生で、身近な人や大切に思う人から、地区出身であること、性的マイノリティであること、障がいがあること、在日コリアンであることなどを、カミングアウト(告白)されることがあるかもしれません。当事者からカミングアウトされなくても、友達との会話の中で差別的な発言に遭遇することがあるかもしれません。自分がその立場であることに気づいてしまうかもしれません。そのときにどう考え、どう行動するか、ということなのです。とすれば、「芽吹き」

のようなケースが、「自分には全く関係のないこと」ではなく、「自分にも起こりうること」と思えるのではないのでしょうか。

また、「その時」になって、急に自分の思いを上手く伝えられるとは思えません。日ごろから自分の思いをちゃんと伝えているから、肝心なときに肝心なことが、ちゃんと伝えられるのではないのでしょうか。それは、人生の大切な岐路である、進路選択の相談をお家の人にするときもそうですし、入試の面接のときもそうです。この「芽吹き」が訴えていることの一つとして、「日ごろから自分の思いをちゃんと伝えられるようになっていこうよ」というのがあるように感じられるのです。人権学習や他の授業やいろんな場面でも。そういう力が、先々で大事になってくるということ。知ること、よく考えること、自分の思いをちゃんと伝えることの大切さを訴えているように思います。

差別って何だろうって、改めて考えさせられました。この「芽吹き」には、いろいろな差別が表現されていて、その差別は一人一人違う差別を受けていました。あざ？やけどの痕？部落？水平社宣言？いろいろなことがこの作品には含まれていて、すごく考えさせられる時間でした。

「人はみな同じを求めている」これは、どこで聞いたかは分かりませんが、差別にもつながっていると僕は思います。自分と少しでも違っていると差別をする、自分と同じではない、たったそれだけで人間はその人たちに違いを求めます。なんで人は差別をするのか、なぜ人は同じを求めるとか、これ以外にも溢れるくらい差別についての疑問が出てきます。そんな疑問をどうやって解くのか。

僕の考えは、人間は肌の色、目の色、髪の色、顔、体型、性格、全てが一人一人違う。それによって一生差別がなくならないと思うんです。あくまでも僕の考えです。文句があるなら僕に言うてください。は？そんな無理やん、と思う人がほほみんなだと思えます。でも、なくすことはできなくても、減らすことはできると思うんです。自分とは違うからなんやねん、同じ地球人、同じ人間やろって。あざ、やけど、部落、肌の色、障害、男女、これは全て違います。でも、同じ地球人、同じ人間ってのは、差別を受けている人と差別する人とはまったく同じなんです。生きている、それだけでみんな平等なんです。なので、僕は将来、差別を減らしていけるような行動をし、今差別で苦しんでいる人たちを助けられる、そんな人間に僕はなりたいです。 TR

その通り！同感です。種としては、みんな同じなのです。にもかかわらず、ちょっとした違いを見つけては、自分が上に立って優越感を感じたいために、いじ

めや差別をする。愚かなことです。馬鹿馬鹿しい話です。情けない人間です。そんな人間になりたいですか？ということ。簡単なことです。何も難しい話ではありません。その根本原理を説いているのが、「水平社宣言」です。

2年生の時、「水平社宣言」を中心に、近代(明治～戦中)の「日本の人権獲得の歴史」について学んだと思います。今は、それ以降、現代(戦後)の「日本の人権獲得の歴史」について学んでいるところです。

感想の最後の、「そんな人間に僕はなりたいです」の一節で、次の文が思い浮かばれました。

雨にも負けず 風にも負けず  
雪にも 夏の暑さにも負けぬ  
丈夫な体を持ち 欲はなく  
決して怒らず いつも静かに笑っている  
一日に 玄米4合と 味噌と少しの野菜を食べ  
あらゆることを 自分を勘定に入れずに  
よく見聞きし 分かり そして忘れず  
野原の松の林の陰の 小さな茅葺き小屋にいて  
東に病気の子もあれば 行って看病してやり  
西に疲れた母あれば 行ってその稲の束を負い  
南に死にそうな人あれば  
行って怖がらなくてもいいと言い  
北に喧嘩や訴訟があれば  
つまらないからやめろと言い  
日照りの時は 涙を流し  
寒さの夏は おろおろ歩き  
みんなにデクノボーと呼ばれ  
ほめられもせず 苦にもされず  
そういうものに わたしはなりたい

ご存じ、宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ」です。これもですが、「水平社宣言」も、声に出して読みたい文です。言葉の強さに、読んでいて力が湧いてきます。

人は、いたわって優越感に浸るのではなく、対等に尊敬し合うものだという、根本原理を説いた「水平社宣言」。「人の世に熱あれ、人間に光あれ」と説いた「水平社宣言」。今一度、見直し、口ずさんでみませんか。

僕はこの話を見て、典子ちゃんをいじめていた子どもたちは、なぜいじているんだろうと思いました。子どもの間だけでは、どの場所が部落かなんて分からないのに、典子ちゃんが部落出身だと分かったのは、男の子の親が教えたのではないかと思いました。男の子たちは怒られたらすぐに謝罪をして、典子ちゃんとも仲良くなったので、理由もないままいじているのだと思いました。親が部落に対する間違った考えを子どもに教えないければ、子どもたちの間での部落に対するいじめや偏見はなくなっていくのではないかと思いました。

おばあちゃんが昔、息子の結婚を反対して息子が死んでしまったという話では、今までの人権学習では差別をしている人よりも差別を受けている人の方を注目してきていたので、今までにない新しい考え方ができまし

た。おばあちゃんは大変な息子を失って、差別がどれだけひどいもので、自分がしてきたことがどれだけひどいものだったのか初めて分かっていました。差別をしている人にも差別はいけないものと知る機会があって、それに気づけない人が多くいるのは、差別について知ることから逃げているんだと思いました。差別をしている人も、自分の考えだけを押しつけるのではなく、一度立ち止まって自分の考えを見直してみることで、差別に対する偏見がなくなり、意識が変わってくるのではないかと思いました。差別を減らすためには、社会全体の意識だけでなく、一人一人の意識も大切だと思いました。

AH

「社会が悪いから」とか、「みんなもしているじゃないか」とか、社会全体の責任にすり替えてしまうことがあります。みなさんも一度は口にしたことありませんか？確かに社会やみんなも悪いのかもしれませんが、でも、だからといって、一人一人の責任が免れるわけではありません。そのことがちゃんと分かるためにも、常に人権問題に向き合い続けることです。

ハンセン病問題が、大きく注目されはじめて20数年。性的マイノリティやLGBT+が大きく注目されはじめてしたのは、この数年。新型コロナによる差別は、昨年から。それをきっかけにして、今アメリカでは、アジア系移民に対する差別も起こっています。

時代が進むとともに、常に新しい人権課題が注目されています。差別者のことをとやかく言うことがありますが、常に人権意識を磨かないと、自分もいつの間にか差別者になっているかもしれないということです。

でも、どの人権課題も、根本原理は同じです。様々な差別について知ること、様々な被差別当事者の声に耳を傾けること、そして、差別を受けている当事者にスポットを当てるだけでなく、「自分はどうか」と、自分目線の一人称で考え、そして語り合うことです。語り合うことなくして、いじめも差別もなくせません。なくそうと思うなら、語り合う一人に、自分になっていくことです。



5月10日、この学習の一環として、弘瀬喜代(ひろせ きよ)さんという方にお話しに来ていただきます。

弘瀬さんは徳島市内の方で、これまで多くの部落差別による結婚差別の事例に関わってきました。今回、明るく元気に、分かりやすく、部落差別の愚かさをみなさんにお話ししていただきます。そのなかで、みなさんも考え、これから生きていく参考にしてもらいたいと思っています。

また6月には、中学生生活最後の人権作文にチャレンジしてもらいます。「え～また～」といった、心ない声が挙がることはないと思っています。昨年からの1年間をふり返り、人権について気づいたこと、感動したこと、後悔したこと、苦しかったこと、嬉しかったこと、学んだこと、また自分自身変わったなと思うことについて、意欲的に書いてほしいと思っています。今回の講演会も、その参考にしてみてください。